

斜里町の日甜時代のビート耕作について

日置順正

〒099-41 斜里郡斜里町朱円

知床博物館協議会委員

はじめに

斜里町の甜菜耕作の歴史は古い。町史や、その他の記録、及び現存せらるる各部落の齢八十歳以上の古老の少年の頃の記憶を辿ってもらうと、大正13年に大栄地区で二人の農家が、会社と農会の指導で僅かの反別を試作したようだが、止別駅迄の搬出は遂にしないで終わったようだ。当時本町でビートが生産されても、その原料ビートは遠く十勝の帯広に在る日甜工場まで貨車輸送しなくてはならない事情にあった。そこで釧網線の止別～斜里間が漸く大正14年12月開通し、待望の輸送の道が展けたので会社や、農会では翌冬一月から本格的な輸送開始可能を見越して、町内農家に大正14年からの耕作奨励に積極的に取り組んだ。

その頃の鉄道網は整理された今日以下で、道央・道東に出るのには遠軽を経て名寄廻りで旭川へ出るか、北見～池田廻りで帯広へ出るか二本しか無かった。大正の終り頃は農家経済は悪化し、高台地方では連年の春先播種期の風害に痛めつけられ、肥沃な地帯は水田に変様し、行政でもその指導に頭を悩ませている実情にあった。そこで日甜工場まで輸送の途が展けたことにより、この大農村に着目していた製糖会社も、農業振興の途を模索していた農会も、協力して真剣にビート耕作農家の開拓に取り組んだ。その方法は保険勧誘員がそれらしい人に目星を定めるように、夫々の部落の篤農で信望があり、且部落創りに情熱を持っているような人と先ず話し合い、賛同を得て耕作の実績を挙げて貰い、それによってビート耕作の有利性を立証すると云う方法を採用した。

大正14年の町内の耕作者は、大栄と、朱円中区の数人づつが試作し、翌15年には峰浜、朱円中、西、以久科南北に耕作域は耕作組合が出来、昭和2年には朱円東、越川、川上地区にも組合が結成せられた。然しその時期は前期のように本道は周

期的な温暖期に入り、水田化可能な肥沃な地帯では、弥が上にもその熱に煽られたのと、周囲を水田に囲まれての畑作ビート作りの不向も手伝ってその地帯への取り組みは難しいようだった。

そのようなことから本町のビート耕作の初期は、ビート耕作上最も恐れられた稚苗期の風害率の高い地区より普及していたことも皮肉な運命であるが、それも農産物価の不安定な時代に、千斤（600kg）斜里駅土場渡しで7円と云う価格協定作物としての魅力からであった。その他ビートは従来の豆類、麦類、馬鈴薯などと、比較すると、耕作上、先ず稚苗期の風害を筆頭に、一日中腰を曲げての難しい間引の連続、噴霧機を背負っての防除、大量の原料ビートを駅土場への搬出など決して作業上は有利な作物ではなかった。然し反面収穫後の莖葉の秋耕の緑肥や、その後の有畜混同農業化への貴重な飼料としての役割など大きな利点も見逃せない。私は兼て博物館の依頼により、本町農業の古い歴史を遺すべく、各地の古老の方々の温い御協力により、既に澱粉工場の推移と、今は幻となった曾ての水田耕作の二件の調査を完了したが、前二件の調査は殆ど私の足によって調べ上げたが、残念ながら今回は足の成果は期待出来なかった。

何分にも斜里町の所管が大正14年、日甜帯広工場へ原料ビートを送り始めてから、昭和11年日甜磯分内工場の操業によってそちらに変わり、更に昭和33年地元中斜里にホクレン工場が建設せられたその時点で日甜との縁が切れ、斜里の駐在所も店終いになって、何もかも調べる綱が切れて失ったことと、5～60年も前のことなので殆ど書類が時効になって全く取り付く手段が無かった。そのようなことから日甜美幌工場へ足を運んだが引き継がれたものは皆無だった然し幸い磯分内工場所在地の標茶町立図書館よりお借りした、「日本甜菜

糖業六十年史」及び、道立図書館所蔵の「甜菜糖業巻別冊」、日甜帯広資料館など貴重な資料を頂き数字的にも記載することが出来得、更に昭和16年より斜里駐在所が昭和33年閉鎖されるまで17年間主任として勤務された堀内英勝氏（現在北見市在住）から部落別中間受入土場図など記憶新たな御贈与を頂き、又町内古老の方々からも今回も大変お世話になって漸く纏め得ることが出来、御協力下さいました皆様方に深く感謝すると共に衷心より御礼申し上げる次第である。町内の各部落の歩んだ道は同様であるので、主として体験記を以って代える。

1. 朱円で最初のビート作り

大正14年（正式耕作では町内初）朱円中區で羽田野耕三（6反）を中心にして、石川小平、日置仙助の二人が夫々3反歩づつ、（勿論部落創りの大先覚者羽田野耕三に奨められて）、耕作した。初体験なので全てを会社駐在員の指導によって行ったが、その頃の農業自体が欧州大戦景気による北海道農業の略奪経営からやっと夢が醒め、再生をかけ踏み留った人達で根性はあったが、何分にも農具もやり方も幼稚だった。随って後で解ったことだったがビートが酸性土を嫌うとか、深耕で堆肥が必要だとか噴霧機背負わなければならないなど、全く知らなかった。過燐酸石灰など化学肥料が珍しい時代でもあった。私の家では父が他の職業に就いていたので、高等科二年を卒業したばかりの私（体格がよかったし、前々より畑仕事に慣れていた）と母とで耕作したが、会社の人は特別に面倒をみてくれた様だった。深耕しがよいからと言っても馬も強くないし、一頭曳きプラオとて大型でもない。先々教わるようにして、漸くビートは発芽してはくれた。細長い二葉の珍しい苗が、…処がその年、大正14年はまだ当地は温暖期の中で米が豊作だった位の春先から高温続きのため、地蚕が大発生した。折角のビート畑も食い荒され、会社の指導で鋸屑に石油を滲したのを各畦の上に散布した。まだその年は防除はしなかったし、中耕期も只除草丈の仕方だった。収穫期になったが、之又大変、それに適した作業具が何もない。兎に角ビートは大根と違って地上に出ていないし（現在は違う）、出来が悪いから葉も小さいので手で握る訳にもゆかず私の家では色々思案

の末、大きな窓鋏ホーをよく研いで先に葉を削りとり、その後備中鋏の爪間の狭いのでビートを引かけ抜いてしたが、そのタッピングの仕切りなど合格する筈もなく、又台所包丁で切り直しだった。そして収穫したビートは綺麗に土を落として麻袋に入れて斜里駅迄運んだのであったが、私の家ではその運搬作業は会社に任せた。翌15年は中區で小林乙松、長島清次の両人が耕作したが、この年は大凶作の年で今迄良作を続けた米も皆無、畑作も裸麦、小麦、燕麦も、三分作、冷害に弱い豆類は翌年の種子を確保するのにやっとのと云う中冷害に強いビートは普通作（反当3000斤から4000斤、1.8屯～2.4屯 —（小林鉄治談）—）が得られ、而も価格も安定しているので作業の厄介さは棚上げして、着実に耕作者は増えていった。町内でも以久科南、北區に大正15年耕作組合が一早く結成され、南區の高橋米二は昭和3年反当8000斤（4.8屯）をあげ、全道甜菜耕作共励会において第1位に、不作年の4年にも3、4位に入賞するなどビート耕作の上からも大きな刺激になった。

2. 搬出

先ずその年の晩秋、馬車交通の終りと見定めた時、朱円の男子青年会員は全員出役で三号道路の馬車でガタンガタンの大穴だらけになった輪だち穴の埋め直しに必ず出役した。それは小雪が降ったら何でも早く馬籠でビート出しを始めたからだ。然し年によっては何とか三号道路は運行出来ても斜線道路に全然雪が無く駄目な年もあった。朱円から駅土場迄には三本のルートがあった。（主として寡雪期）

1. 三号～斜線路 2. 一号大排水土堤路 3. 海岸山道路

1) 三号ルート

雪さえあればこのルートが一番通り易く、寡雪な初冬でも砂利石に馬籠の裏金を軋りながらも無理したものだった。けれ共石の上にガリッと乗り上げたら最後、どうにもならず前後の人達が犬勢駆け寄って援け合ったものだ。充分に雪が降ると、当然この道路が主路になって、午前中など今日の賑やかな日の自動車より路上に馬籠の数は多かったと思う。雪が多くなってからの籠台中の狭い馬籠の数多い道路は、是又酷い悪路で夜凍って道型が固まると、翌朝の一番馬は型を破って行くので

重く、二番目馬から楽にはなるが、段々数が増すに従って馬の歩く路も軟くなり、櫛型も崩れそれこそ深い軟い砂の中を重い荷を挽いてゆくように馬には楽な時は無いようなものだった。その上、一日二回運搬する地区の人々は、馬には可愛そうなことを知りつつも、帰りには走らせることが多かった。

2) 大排水土堤ルート

雪の勤い時期、三号ルートが無理な期間使われたがバラスが無く割と楽だった。

3) 海岸山道ルート

1～2ルートが駄目な年止むなくこの道を選んだ。先ず西区の根室道路を北進して海岸の砂丘林に入った。そこは堀割りの砂の上り道路のため、小々の雪が降っても1～2頭通ればすぐ砂混じりの悪路になり、馬にとっては先ず大難所!! 漸くそこを抜けたら砂路を避けるため左側の草原地(枯草原のため降った雪が適当に残りどこを通っても地表は固かった)へ曲って丘陵地を進んだがそのうち前面が藪、どうしてもそこで約50m位下の急勾配の野原を降りねばならない。固いので道型もなく各人各様のやり方で、行けば本道へ乗る直前殆ど横転、ガバーッ余り斜に行くと坂の途中で横転バラバラッ、そうなったら大変で大勢駆け寄って始末するより仕方がなかった。そのような所を乗り切るには、上からの荷重の押し付けにこたえる馬の力と、馭者の腕前の見せ所でもあった。兎に角其處の難所は一台ずつの通過で坂の上では、次々に到着した人達が大勢、馬も、櫛も人も一緒になって滑り降りてゆくのを見守りながら、成功を祈ったものだった。

思えば50余年も前のことながら、朱円の齢七十才以上の男達の必ず経験した厳しい運転試験でもあった。

3. 斜里駅の受入土場

現在の駅東側の公設駐車場の殆どを使っていた。越川、以久科、朱円、峰浜地方の農家から馬櫛で運び込まれるビートで、毎日貨車輸送は続けられながらもあの広い所を埋め尽し高いビートの山になった。大正15年冬から始まったビートの貨車積みは大勢の積込人が、大きな特製のビートホークで先ず貨車一杯になる迄、高いところへ投げ上げ、そこで一杯になったら、一米余の小竹で編んだ簀

表一 1. 買入価格

年別	1,000斤単価	備 考
	600K 当り	
大15	7 円	
昭 2	7 円	
3	7 円	
4	7 円	
5	7 円	
6	6 円	
7	5 円	
8	5 円	割増金 1 円
9	5 円	割増金 50 銭
10	5 円	
11	5 円	
12	5 円	割増金 1 年
13	5 円	割増金 1.5 円
14	5 円	割増金 1.5 円 特別割増金 1.1 円 奨励金 0.4 円
15	5 円	割増金 3 円 特別割増金 1.5 円
16	9.5 円	
17	9.5 円	
18	9.5 円	
19	14 円	
20	34.5 円	
21	600 円	
22	600 円	
23	1,310 円	
24	1,612 円	
25	1,612 円	
26	1,612 円	
27	3,000 円	
28	3,050 円	
29	3,150 円	
30	3,150 円	
31	3,150 円	
32	3,150 円	
33	3,150 円	

をその上に立て廻し、大きな畚に一杯入れたビートを二人で持って、長い歩み板を上って開ける。その力仕事の連続である。今日の若者が如何に体格がよくてもやり遂げられる仕事ではない。ビートを運ぶ、馬櫛に取り付ける運搬箱は、先ず底板は二枚の並べものにし、厚さ約 2 cm、巾約 1.3 m、長さ 2 m、高さ 1 m 位の長方形で上部が稍狭く、荷を降ろす場合荷をそのままで抜けるように作ってある。箱の大きさは大体馬の力に應じて作られ

強い馬で1600～1700斤（960kg～1020kg）普通馬で（1400～1500）斤位の積み荷が出来るよう拵らえてあった。朝早くから各方面より集まって来る馬籠は今のリョーユウ石油店前から次々に一列に並び始め、先頭馬がビートを降ろして、二回目のため走って帰る頃は、後尾の馬は野尻商店辺まで続いていた。受入れは今のリョーユウ店の地下タンクの在る辺に大きな計量機が在って馬籠ごとに計量し、次に土場係の指示によって進行方向の奥へ馬を追った。手前に降ろすのなら人、馬共楽だが、それでは貨車積み場と遠くなり、奥へ行く馬の道に小山が出来て障害にもなり、馬が疲れきって動かなくなる迄そこで降すことは許されなかった。何頭か先に通って道筋が僅かでも出来ていると幾らか楽のようだが、何しろゴロゴロしたビートの山へ重い荷を積んで挽き上げて行くのだから馬としても大変な場所で、広いビート置場の山のあちこちで、人と馬の喧嘩が始まることになる。随ってこの土場は馬の正直と力の試験場のようで、朱円でも1600～1700斤積んで、どんな荒道でも馬方のカケ声（それ行け!!）の一声でぐんぐんのし上って行く馬は、中区の小林さんの青と、日置の鹿毛位でなかったろうか馬も腹をビートにこすり着ける位頑張って晴れて上りつめた時、人、馬の心は通じ、馬方の労る声と、首を軽く叩く慰めに、馬は顔を振って応えるものだった。

さて一回目を降ろし終え、受入伝票の歩引を見ながら、二回目のため馬を走らせ帰途につくのだが、砂質の沖積土のビートは土着きも少く、比較的小股のない素性がよいものが獲れ、歩引率9%の人も1～2人あった。乾燥地のビート作りはそれだけでもまず一步不利で、当時の若者は「真土に負けるな」がビート作りの合言葉であった程だ。歩引率の少いビートを作ることも当時の若者の誇りの一つで、馬鹿丁寧な程の作業をする人が中区に一軒（日置順正）、東区の南部団体に一軒（菊地松次郎）あった。ビート一本一本の小根と土を、芋の皮むき器を逆にしてこすり綺麗にして漸く9%だった。根元のタッピングにしても土落としにしても随分厳しい思いがした。そのようなことから、ビートの搬出時になると、貯蔵置山の土はがしから次の分の用意など、家内総出の仕事であった。それでも農産物価の不安定、不況時代に1000斤7円の契約栽培は大きな魅力であり、当時の青

年はビート耕作に情熱を燃やし、一町五反以上で平均6000斤（3.6屯）が目標であった。朱円で昭和10年頃最初に10万斤（60屯）を収穫した人は西区の宮内さんで、長男の「新」さんが最後の運び終りの肩の荷を下ろし、いつもの野尻飲食店でモッキリを傾けながら厚い伝票の束をみせながら喜んでおられたのがまだ鮮明に脳に残る。

4. 野尻飲食店の思い出

昔、馬籠でビート運搬をした斜里の東部地区の人々で、この店の恩恵を受けなかった者は一人も居ないだろう。それ程皆に好かれ、喜ばれた人気のあった店であった。太い体格の気取らない婆さんが手拭で鉢巻をし、爺さんと一緒に、上手も飾りもない言葉と恰好で、大井山盛一杯の赤飯が十銭、コンニャクや、揚げ、天プラの煮メー皿五銭、モッキリのお菜は大タコの足の皮の切り離れていないズンド切りが六銭、兎に角凄いい人気であった。お昼時近くになると、どしどし次から次へと「パパ頼むよ」が入って来る。最も混む時は娘さんが手伝っていることもあったが、凡らく朝から夕方まで二人共立ち通し、動き続きでよくも体が持つものと思った。大きな丸ストーブに、秋田製の大セイロの重ねに赤飯の蒸し通しで出来上がったのは之又大きな盥に開けての繰り返しのようだった。一日の使用する餅米は三斗位の話聞いたことがある（菊地幸治証言）。兎に角あの大井に山盛りにされた赤飯を今の人では食べきことは無理ではなからうか。本町の東部地区の昔の農家で冬のビート運搬の話になると、必ず話題に出てくる懐かしい思い出である。

5. ビート耕作余話（農家の糖蜜作り）

後記の「日本甜菜糖業六十年史」にもあるように、終戦後人々が甘味料に餓えていた当時、ビートを積んだ貨車が駅土場に着いた時には受入量の半分にも減っていた事実を認めている世相であった。それが食糧の割当強制出荷の重荷に耐えながら割の悪いビート迄作らされたのであるからよくなことは解りつつも自家用分丈は糖蜜を作り凌いだ。その方法は大根をよく荒い鉋か包丁で薄輪切りにし熱湯で糖分を煮出し、その糖液を煮詰める丈のことである。然し当時の農村の冬期間は、今日と違って男も外の仕事が多く、この糖蜜作りも、

表一 2. 日甜時代、甜菜耕作を始めた人々

部落名	年 月	耕 作 状 況	証 言 者
日 の 出	多分昭和 10年頃	麻袋に入れてトロッコに積んで斜里まで搬出した。 自分の応召前に耕作していた。馬車で斜里まで搬出した。	上林 ミエ 八幡伊三郎
峰 浜	大正15年	農会と会社の強い奨めで父金吉が3反歩の試作に応じた。 春の風害の不安と、手間のかかる作業が多く、搬出も遠距離で不向きであったが、 価格の安定が魅力で逐次耕作者が増していった。	藤盛 憲蔵
朱 円 東 朱 円 中 朱 円 西	大正14年 大正14年 大正15年	羽田野耕三に奨められて5反歩耕作（羽田野藤次郎）昭和2年より逐次作り始める 羽田野耕三6反、石川小平3反、日置仙助3反 15年長島清次、小林乙松 栗沢庄五郎 昭和2年より宮内教太郎等を中心にして3号南の地区で作られる	長島 清平 日置 順正 小林 鉄治
越 川	昭和2年	ここでも会社と農会の指導により、先ず島津農場の松岡得郎が10反耕作、翌3年に 附近の松田茂雄、瀬戸精惣、浅倉貞之助等が耕作し、翌々4年には南の方に広まり、 出口仁市、目黒繁村、山田佐兵エ、村崎菊三なども作った。	松岡 得郎 出口 マサ 谷本 松雄
以 久 科	大正15年	以久科北区実行組合の及川多門が中心になり、可成耕作を始めた。以久科第一組合 s 2 / 4 南区も耕作を始め、高橋米二、森野喜三郎、倉本耕作組合 s 2 / 4、20 戸	斜里町史 (第二巻) 近藤 明
三 井	昭和4年	三井地区甜菜耕作組合を組織す。高山 敬を中心に6戸が耕作を始める。 翌年一躍22名になり、甜菜と酪農と結びついた混同農業に取り組んでいった。	斜里町史 (第二巻)
豊 倉 西	昭和10年	資料によると(町史)猿間両組合で、水稻250町収穫0、甜菜6町2800斤とあるので、 全面積が水田化した地帯ではおそらくその頃からと考えられる。	斜里町史 (第二巻)
豊 倉 東	昭和10年	この地区の組合の作物別耕作表によっても(昭和10年)甜菜の反別は西以久科第一、 第二で僅かに7.4町であるが、清水組合は38町の耕作となっているのもっと早く より耕作されていたようだ。(水田耕作時代にはビートは作られなかった)	斜里町史 (第二巻) 大木 サア
中 斜 里	昭和30年頃	この頃より耕作したように思う。	門間 清人
来 運	昭和5年	同年に3つの甜菜耕作組合が結成され、殆ど同時に耕作されだした。 酪農との結びつきが提唱され、大槻源四郎、丸子政五郎、近藤新三等が混同農業の 先駆者。	斜里町史 (第二巻)
美 咲	昭和 2～3年	3号北 小沼源一郎、渡辺広治、松原権吉等 } 先頭になって耕作を 3号南 阿部賢造、島津哲男、横山大八郎、佐藤助松 } 始めた 但し、本格的なビートとの取り組みは、昭和10年水田との決別以降と考えられる	小沼 敏晃 横山 一義 日置 順正
大 栄	大正13年 大正14年 大正15年	山本新作、水谷松蔵の2人が2反歩づつ試作したが、出荷は出来なかった。 大西徳松を中心にして、組合員21名の組合を結成し、大々的に耕作を始めた。 第二組合もこの年組織され、安定作物として取り入れられるようになった。	斜里町史 (第二巻)
川 上	昭和2年	この地区では大野安次郎が中心的役割を担い、自ら組合長となって11戸で耕作組合 を組織し、耕作の普及に努めた。が、本格的に取り組まれたのは昭和10年の水稻耕 作との決別以降であろう。	斜里町史 (第二巻) 日置 順正

綿羊の自家紡毛、編物も殆ど主婦の仕事であって休農期であるべき冬期間主婦の手には休む暇は廻って来ない実情であった。

6. 大栄 佐藤政権氏談 (93才)

大栄地区の人達は止別駅に搬出した。矢張り他地区同様馬籠だった。経路は上斜里五線を北進して、トーツル湖に至り、凍結湖上を約2km進んで海岸道路を止別駅寄りに行き線路を越えて駅土場があった。大方の人は一日二回の運搬だったが中には三回を頑張る人もいた。どこの駅土場も受入開始が午前八時だったので、それ迄にたくさんの馬が到着して長い列が出来る。寒いのでお互い石油罐で作った簡単な薪ストーブを持ち、焚き合って時間待をする訳だ。朝出発に当たっては、一頭でも先馬になる為に、道添いの人に気づかれぬよう馬の鈴の音を低くしたり、携帯ランプの光を遮蔽したりして其處の前を通ったものだった。然しガッチリ凍った朝の一番馬は道型が固まり、それを壊して行かねばならないので馬は楽ではなかった。長い馬搬の間に、一度酷い目に逢ったことがある。二回目の帰り途、急に大吹雪になって前後も左右も、全然見えなくなった。湖上なので道型もなく、こう云う場合は人間より感の働く動物がよいと思って馬任せにしたが流石の馬もいつもの陸上への上り口が判らんらしい。勿論自分も判らん。仕方ないので其處に馬籠を置いて馬を引き「ままよ何とかなる」と覚悟を決め、あちこち随分と迷った末漸く帰ったことがある。翌日吹雪が止んでから行ってみたら私のように難儀した人の籠がもう一台あった。

冬の搬出は家内総出の作業で、私の家では馬が一回目行った間に家で作業する人が肥料吠二十三~二十五吠、綺麗に土を払ったビートを詰めて置く方法を探ったが、別の場所に積み置いて馬が帰ったら、総がかりで積み込む人もあった。昭和14年全道甜菜品評会に出品して見事一等に入選したが、それには完熟堆肥を充分入れて深耕し、稚苗期の風害を守る為、巾の広い網を高く周囲に張り巡らすなど、子供を育てるような気持ちで取り組んだ。多分普通農家の倍位反収1万斤(6屯)は越えたと思う。ビートは価格が安定していて、その点魅力はあったが、春の風害、間引の手間、搬出の苦勞などが多く、増反のため会社でも随分努

力したが当時は余り伸びなかった。

7. 峰浜 藤盛憲蔵氏談 (85才)

峰浜の最初の耕作者は父の「金吉」だった。大正15年会社と農会の強い奨めで先ず三反歩試作した。父は農業熱心で何事にも積極的に取り組んだので頼み易かったのであろう。私も青年期だったので当然先になって作業したが、風害には弱いし、腰の痛い間引作業があるし、斜里の駅土場まで15kmもある所まで冬に原料ビートを運搬しなければならない。その上作業道具は何もない。決して進んで耕作するような作物ではなかった。然し1000斤7円と云う価格の安定只それ丈に魅力を感じたので作った。譬え秋に畑での収穫が終ってもあの遠い斜里の駅迄ガタガタ道を馬車に積んで運ぶようなことは出来ることではない。とは言っても冬は冬で馬籠が多くなれば雪道はザクザクになり、而も朝は天候がよくても途中で急変し、吹雪にでもなったら、行くも不安、かと言って一本道に荷を積んだ籠を捨て置いて帰る訳にゆかず、遠距離の農家は倍の苦勞があった。

私は或る年、会社の担当員に頼んで秋口トロッコで搬出したことがある。その方法は、先ずトロッコ向きの大きな箱を拵らえ、峰浜の停留所に置いてビートを満載して置き、翌日朝早く斜里まで運び、今の巴旅館の前の辺に降ろし、帰って来て翌日の分を又畑から馬車で中間出しして積んで置く。そのことを三日繰り返して、四日目に空馬車で行って一日がかりで土場へ運ぶ。そのようにして秋のうちに出荷を完了したことがある。戦後堀内さんが担当されるようになってから、峰浜地区では神社前道路の北側の空地と年によっては市街西側はずれの道北空地に、宇奈別地区では、東八線と一号の交差点北東側に中間受入土場を設けて貰ったので農家は大変楽になった。尚峰浜地区は遠いので馬籠でも一日一回場所で、昼食の飲食店は荒木さんが峰浜出身なので多く荒木飲食店のお世話になった。昼食代は1000斤当り30銭の搬出手当で充分賄うことが出来た。

8. ビート増収上私の特に実施した方策(日置)

1) 稚苗期の風害予防の為自然木のサキリで人工の防風垣の造成

昭和9年頃、直播ビート稚苗期大難関所は風害

表-3. 日甜時代斜里町の耕作反別及び反収調べ

年度別反別反収表				年度別反別反収表			
年度	反別	反収	資料	年度	反別	反収	資料
大14	26.32町	1,777斤		大14	26.32町	1,777斤	
15	41.89	2,848	著者 北海道	15	42 弱	3,000近	
昭2	132.16	3,465	道立図書館所蔵	昭2	132 余	3,000突破	斜里町史の記述 を表に現わす
3	393.49	2,887		3	400 近		
4	421.10	3,655	甜菜糖業巻別冊	4	421.10	3,655	
5	460.54	3,050	より	5	450 余		
6	467.86	3,073		6	467.86		
7	435.75	3,363		7	大体同称		
8	448.07	3,885		8	〃		
9	484.25	4,386		9	〃	4,386	
10	541.73	3,658		10	541 余	他作物の不作 に不拘農家の 注目をあびる	
11	639.79	4,850		11	640	4,850	
12	717.63	3,806		12	717		
13	794.98	4,257		13	800		
14	768.44	3,129		14	反別、反収入共		
15	730.31	3,554		15	に下向		
16	754.64	2,804		16	700		
17	751.36	3,018		17	754		
18	455.91	2,052	清里町分村	18	451	2,000	清里町分村
19	531.55	1,498		19		1,458	
20	490.33	834		20		834	
21	360.05	742		21	360 余	742	
22	373.05	828		22			
23	250.11	704		23			
24	259.50	1,330					
23	226.30	800	市町村勢要覧 より				
25	290.20	1,500					
27	330.00	3,200					
31	476.66	3,815	日本甜菜製糖株 式会社 ビート資料館 (帯広市) より				

註1：昭和18年清里町分村により反別の減少は当然なるも、戦争の影響で労働力、肥料など全く不足して反収は著しく減じた。

2：表の左側部分は「甜菜糖業差別冊」（道立図書館蔵）等により、右側部分は斜里町史の記述をもとにそれぞれ作成した。

であった。それさえ無難で過ぎれば、その後の増収はその人の力の注ぎ処の効果は大体期待出来た。私はその風害防止のため、今日では到底考えられないような努力をしたことがある。その年のビート播きの予定地は、私の畑の中では上等地で何を播いてもよく出来ビートも6000斤以上欲しい約一町の土地だが防風林がない。幸私には、家より500~600m離れた所にドロ、檜、樺などを主にした第二次自然林の密生した林が約一町歩（開墾予定地）有ったので、そこから約4mの真直ぐのサキリ用材を一冬かかって伐り出し、翌春、東西135m南北70mのΓ型の防風垣を造ったことがある。約2.5m置きに太い柱を建て、約2m高さに横木を縛り、その横木に一本を針金で巻き、30cm位の深さに溝を掘ってサキリを一行に並び建てたものだ。強い風には垣を守る為に柱毎の支柱も要り若い時代の情熱と体力もあったが増産の為に随分と挑戦したものだ。

2) 犁底板破壊の為の方策

素性がよく、而も長いビートを獲るには、軟く深耕された畑が第一条件である。そこで私は一考を案じ、水田プラオの古いのを一台入手して、プラオの上羽根板を外し土の反転を無理にしないようにして、先頭の力強い馬は大型の一頭曳きプラオで出来る丈深耕し、次の馬は改造した水田プラオを曳かして溝を歩かし計35cm位は軟らかく出来た。当然のこととて酸土矯正もしたし、堆肥も充分入れてのことで、幸風害もなく期待通り、長い素性のよい見事なビートが反当6500斤（一町二反一枚画）の収穫としたことがある。その後この水田プラオは工夫して二頭曳きプラオの下に取り付け馱者一人で作業することに成功し、注目されたことがある。

3) ビートの根の多い方向と、肥料との関係について

昔のビートは細長い品種で今のより形がよかった。両側に縦の細い溝が一條づつあってそこに根が集中していた。私はその根の早く出る方向と、肥料のある畦とを一致させたらビートの小さい時の成長が早いのではなからうかと考え、野菜畑の片隅に十粒の種を播いて、葉と、溝との関係を調べた。その結果溝の出来る方向は本葉の出る方向

と一致していることが判り翌年から間引の場合可能な限りそう云う方法で作業したことがある。而し秋迄には、土中全体から肥料を吸収するから大差はない筈だし比較畑が無かったので結果は残念乍判らなかったが、昔の農業はそのような小さいことも研究したものだ。

表-4. 中間受入場所調べ

地区名	年 別	受 入 場 所	集 荷 期 間
峰 浜	昭26~32	1. 峰浜市街東はずれ 国道北側の空地 2. 峰浜市街西はずれ 国道北側の空地 3. 宇奈別地区は東8線西1号北の角(坂井氏) 同交叉点東南角(平賀氏土地)	11月上・中旬
朱 円	昭29~32	東4線西3号南 黒川氏土地 朱円3区1円	量多いため 11月上・中・下旬
以久科 越 川	昭28~32	1. 西3線東6号南 森野、高橋氏土地 元村氏土地も借用 2. 西3線東6号北の元村氏畑に置いたこともある (高橋一郎氏談) 3. 西1線西6号南の角 以久科1円 越川も 同場所搬入	11月上・中・下旬
富 士	昭28~32	牛馬診療所前 富士1円三井1部	11月上旬
大 栄	昭29~30?	旧小学校前広場 大栄1円 5線東~6号南 現清里町公民館の在る所(橋本道一氏談)	11月中旬
美 咲		ナ シ 駅土場	
三 井		ナ シ 中斜里火山灰取場の東側 篠田氏土地	11月上・中・下旬
来 運		9号南の現ホクレン土場の旧土場 篠田氏所有地	同 上
川 上 中斜里	昭25~32	9号南の火山灰土場の東側 篠田氏所有地 搬出地区 川上、来運、三井、中斜里 (貯蔵) 中間受入土場	11月上・中・下旬
豊 里		26~27年頃1年間受入したように思うが不詳	11月中旬
		注1. 35年も以前の記憶を辿ってのことなので多少相違している処もあるやもしれぬ。 2. その地区の受入場所も年によって多少変動あったと思う。	

日甜斜里駐在員堀内氏提供(北見市在住)

参考資料：日本甜菜糖業60年史より抜粋

- 日本の甜菜耕作の歴史は古い。明治3年政府は種子を輸入し、東京開墾局にて試作、明治4年北海道開拓使は、札幌官園で試作札幌農学校でも続けた。
- 戦後の耕作については、600kg当りの価格21~22年度は600円、23年度は倍の1,310円に上げたが、主食作物の生産に全力傾注され、反別も全道的に激減し、甜菜用として配給せられた肥料も、他の供出主食作物に転用され、収量も道平均反当り546kgという惨な記録となった。更に当時は占領軍々政部下に置かれ、輸送も優先順位があつて、甜菜の輸送は下位に在り冷遇された。而も唯一の甘味資源の故甘味に枯喝した人々により輸送途中の盗難が頻発し、工場到着時には受入数量の半にも充たぬことさえあり、為に工場は度々原料切れで作業を中断することがあつた。
- 当時は国の助成を期待することが出来ない状態であつたので、会社は原料増産の必要から独自に、搬出手当、貯蔵手当、実行組合手当などを支給すると共に、耕作者の特典として、砂糖の還元を実施することに申請成功した。

砂糖 還元 表	年 度	昭和21年	昭和22年	昭和23年	昭和24年	昭和25年	昭和26年
	出 荷 量 600kgにつき	1.8kg	1.8kg	1.8kg	3.6kg	5.4kg	5.4kg
	面 積 10aにつき		1.2kg	1.2kg	1.2kg	1.2kg	1.2kg
	戸 数 1戸につき		1.2kg	1.2kg			

大正14年より町内農家僅かの人達によって耕作し始められた原料ビートは、日甜帯広工場へ貨車輸送していたが、昭和11年、時の北海道長官佐上信一は、天恵の乏しい天北、及び根釧の地に入植し困窮を極めていた人々を救済することの急務を考え、磯分内に北糖の土別に旧明糖の新工場を建てた。以後本町の原料ビートは昭和33年、中斜里にホクレン工場が建設せられるの間磯分内工場に搬入された。その後磯分内工場は昭和45年、ホクレンに9億7千万円で売却され閉鎖した。

中間受入所位置図

